

『虎に翼』と法の下での平等

前川 直哉

2024年度上半期のNHK朝ドラ『虎に翼』は、女性法曹の先駆者である三淵嘉子さんをモデルに、主人公・猪爪寅子と彼女を取り巻く人びとを描いた作品です。戦前・戦後の昭和を描きつつ、現在に至っても根強く残るさまざまな女性差別をまっすぐに取り上げ、多くの視聴者の共感を呼びました。

女性差別だけではありません。朝鮮半島出身者や、同性愛者など性的マイノリティをめぐる差別についても正面から扱われました。私は近現代日本における男性同性愛の歴史の研究者として本作の考証に携わる機会を得ましたが、毎週送られてくる脚本を読むたび胸が熱くなったのを覚えています。「透明化されてきた人たち」を描きたいという脚本の吉田恵里香さんの思いが、キャストの皆さんの素晴らしい演技や、練り上げられた演出とあいまって、たくさんの人びとの心を揺さぶる傑作となりました。

110作目の『虎に翼』に至るまで、朝ドラでこのように正面から同性愛者の苦悩が描かれることはありませんでした。本当は存在しているのに「いないこと」にされていたといえます。それは、ドラマなどエンターテインメントでの話に留まりません。たくさんの法律や制度が、性的マイノリティの存在を「いないこと」にして組み立てられています。

2024年10月、東京高裁は、同性同士の結婚を認めない法律の規定は「差別的な取り扱い」であり、憲法に違反するとの判断を示しました。全国で行われている同様の訴訟では、憲法24条とともに14条の「法の下での平等」が鍵となっています。「すべて国民は、法の下に平等であつて、人種、信条、性別、社会的身分又は門地により、政治的、経済的又は社会的関係において、差別されない」。第一回冒頭で読み上げられ、寅子の友人である山田よねと轟太一の法律事務所の壁にも大書されるなど『虎に翼』の大きな軸となったこの条文は、私たちに問いかけてきます。誰かを「いないこと」にしていないか、と。



PROFILE

まえかわなおや：福島大学教育推進機構准教授。(一社)ふくしま学びのネットワーク理事・事務局長。兵庫県生まれ。高校3年時に阪神・淡路大震災で被災。灘中・高教諭を経て2014年に福島市に転居し「ふくしま学びのネットワーク」設立。2018年より福島大学教員。専門は社会学(ジェンダー/セクシュアリティ)、教育学。著書に『〈男性同性愛者〉の社会史』(作品社、2017)、『「地方」と性的マイノリティ』(共著、青弓社、2022)など。